

愛媛の救急医療を守る147万人の県民運動

あ い きゅう いち・よん・なな うん どう
(愛救147運動)

平成22年度



愛媛の医療を守る『7人のDr.』

県内の救急医療の受診実態

【二次救急医療機関での救急患者受入実態調査(平成22年度)】

1. 調査依頼先 県内の全ての救急告示医療機関(59機関) 回収率 100%
2. 対象患者 診療時間内の救急車での搬送患者、診療時間外の全ての患者
3. 調査期間 平成22年11月1日～11月30日(30日間)
(平成20年度からの3年間、毎年11月に実施)

4. 調査項目

受診の時間帯(2時間単位)

受診者の属性(年齢、性別、住所)

来院形態 (救急搬送、自力:walk-in、転院搬送 他)

主な受診科

主な傷病 傷病大分類による区分

症状の程度(消防統計と同様の区分)

- ・特に軽症 …… 通院加療を要しないもの
- ・軽症 …… 入院を要しないが通院加療を要するもの
- ・中等症 …… 生命の危険はないが入院を要するもの
- ・重症 …… 生命の危険の可能性のあるもの
- ・重篤 …… 生命の危険が切迫しているもの
- ・死亡 …… 初診時死亡が確認されたもの



たかちゃん

【医療圏別の患者受入状況】

県内受入患者総数 … 14,647人(H22.11 1ヶ月間)

医療圏	宇摩	新居浜 ・西条	今治	松山	八幡浜 ・大洲	宇和島	計
患者数	861	2,262	2,128	6,002	1,319	2,075	14,647
構成比	5.9	15.4	14.5	41.0	9.0	14.2	100.0
救急告示病院	4	11	13	17	9	5	59
患者数/病院 (A)	215	206	164	353	147	415	248
(A) 大洲・八幡浜を 1とした場合	1.47	1.40	1.12	2.41	1.00	2.83	

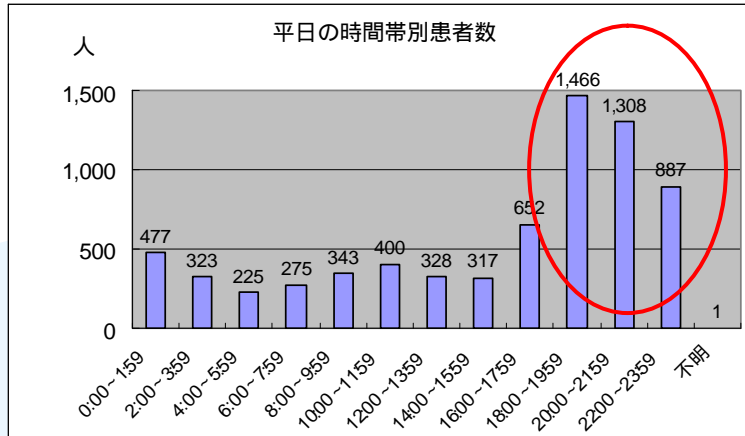
- 医療圏別では、「松山圏域」の患者数が最も多く、全体の4割強を占めている。
- また、救急告示病院当たりの平均患者数では「宇和島圏域」が最も多く、次いで、「松山圏域」、「宇摩圏域」の順となっており、単純比較すると「宇和島圏域」と最も少ない「八幡浜・大洲圏域」との間で約2.8倍の差がある。



赤ちゃん

平日・時間外は午後6時～8時の患者が最多

【時間帯別患者数】



患者数7,002人

- 平日・時間外(18:00以降)の受診動向を見ると、「18:00～19:59」の時間帯の患者が最も多く、その後も深夜0時頃まで、多数の患者が来院している。

平日・日中の患者は、主として救急車による搬送患者。



山嵐

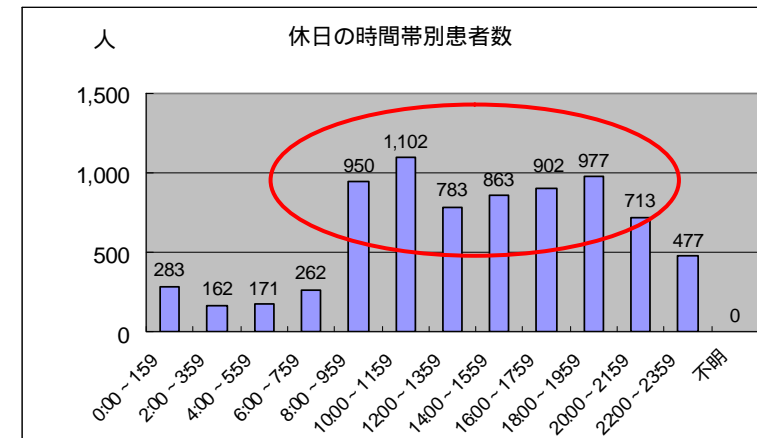
休日は、午前8時～午後10時頃まで絶え間なく来院

患者数7,645人

- 休日の受診動向を見ると午前8時以降、日中から夜10時頃まで、多数の患者が絶え間なく来院している。

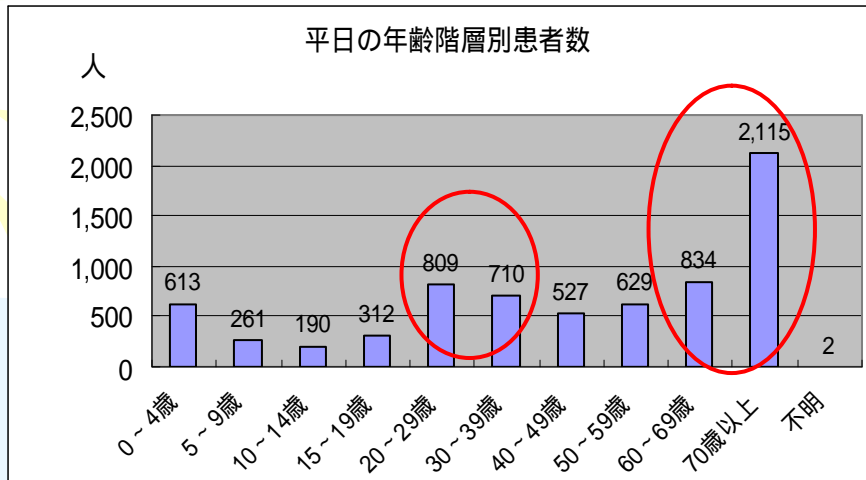


うらなり



【年齢階層別受診動向】

平日・時間外及び休日とも70歳以上の高齢者層が最多



- ・「70歳以上」30.2%
「60～69歳」11.9%
と高齢者層で4割以上を占めている。
- ・次いで、「20～29歳」「30～39歳」の比較的若い勤労者層が11.6%、10.1%と続いている。

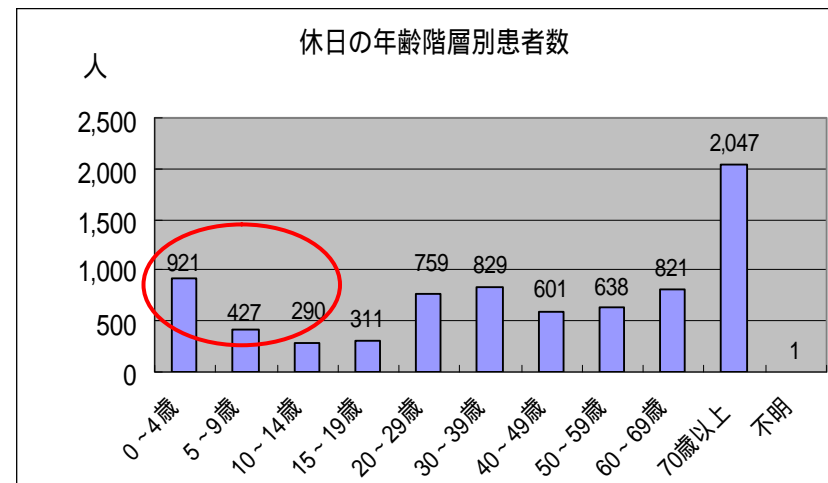


母子だいて

・休日も、平日とほぼ同様の構成だが、小児の割合が若干高くなっている。

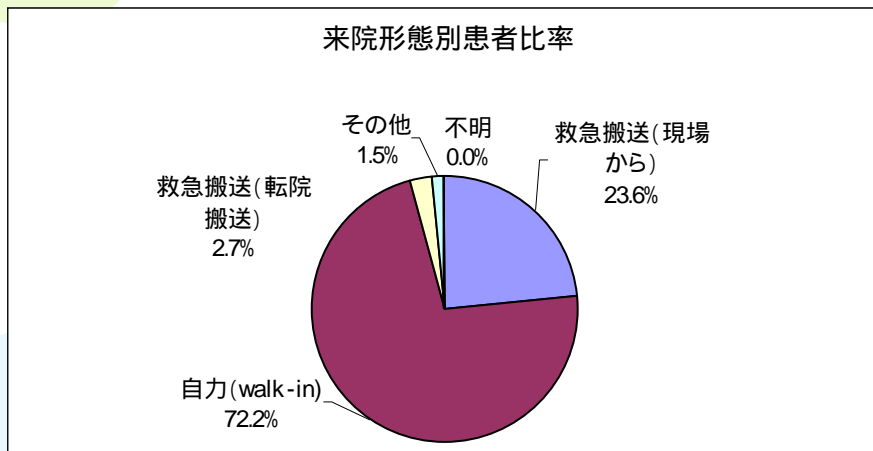


たぬき



【来院形態別受診動向】

自力で来院(walk-in)の患者は、救急搬送患者の2.7倍



- 自家用車等を利用し自力で来院(walk-in)する患者が、全体の7割以上を占め、救急搬送患者の2.7倍となっている。



赤ちゃん

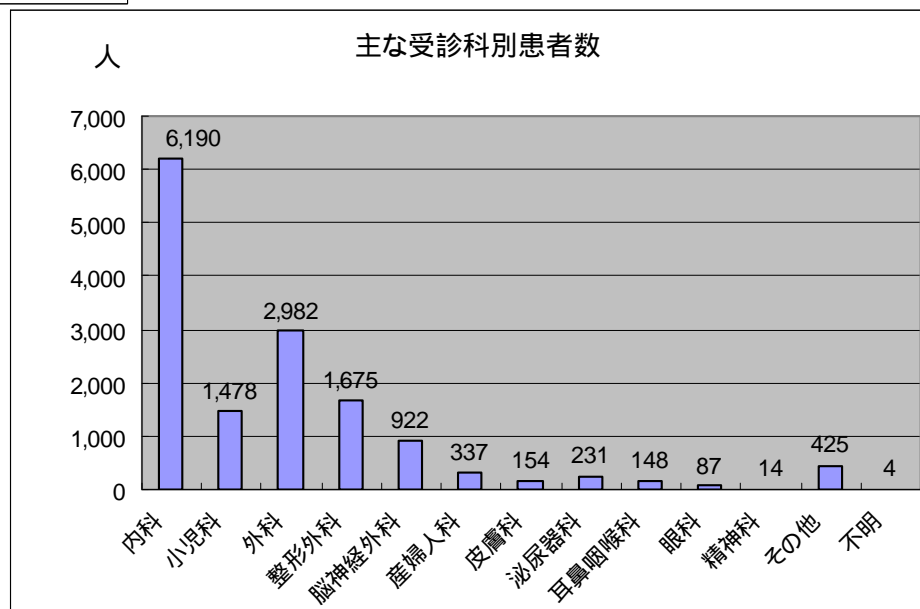
【主な受診科別患者数】

内科の受診患者が約4割



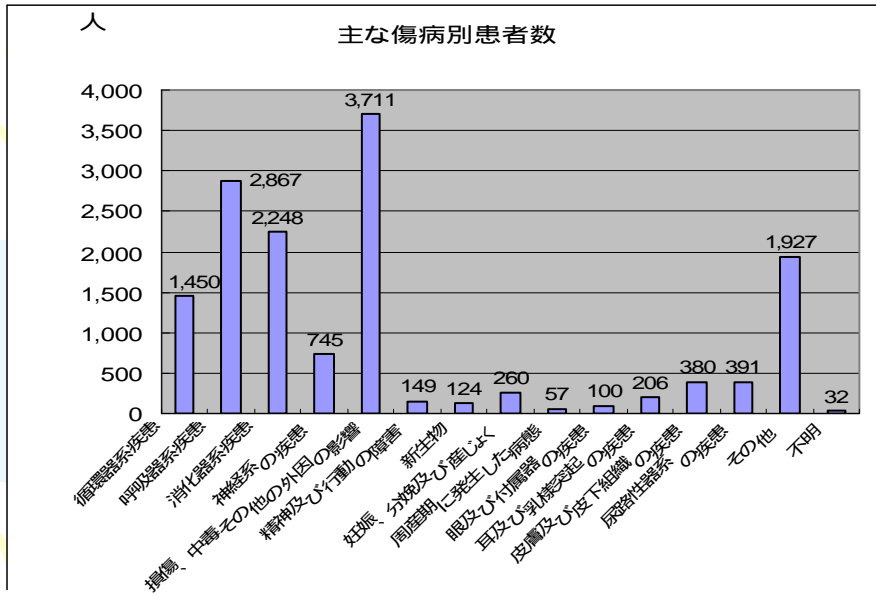
土ちゃん

- 患者の主な受診科では「内科」が最も多く、42.3%を占め、以下、「外科」、「整形外科」、「小児科」の順となっている。



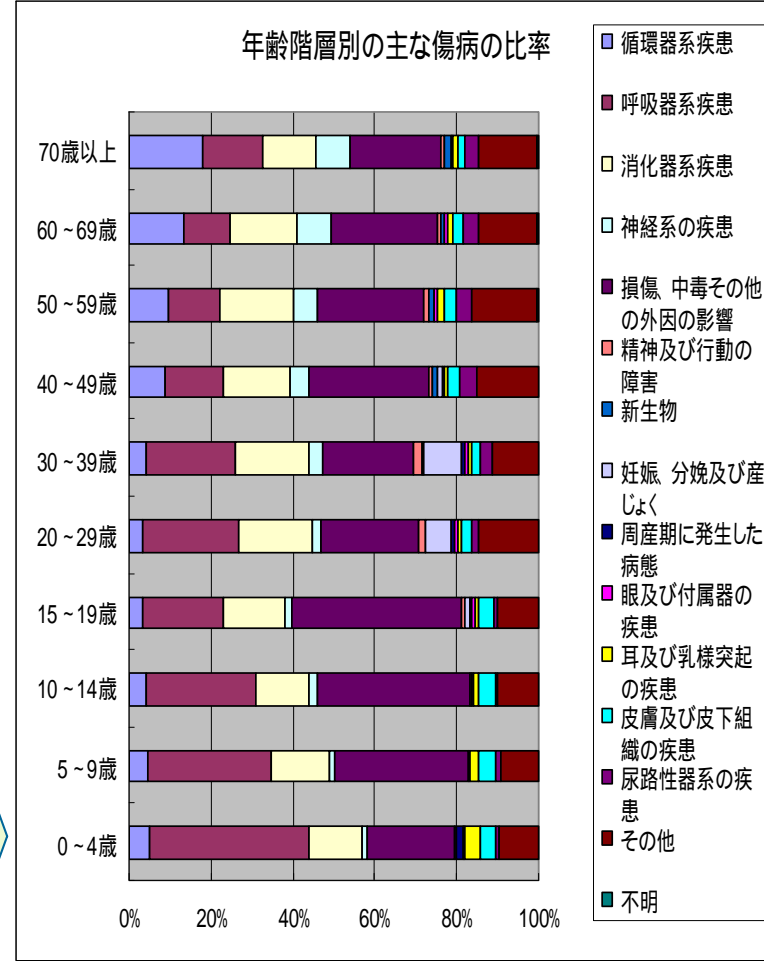
【主な傷病別患者数】

損傷・中毒等が1位、呼吸器系疾患が2位



【年齢階層別の主な傷病】

年齢階層によって傷病の患者比率が異なる



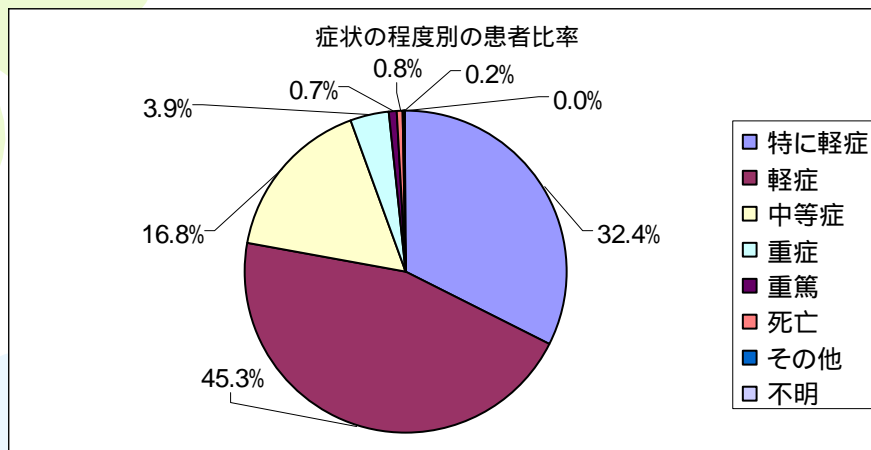
- ・ 未成年では、年齢が低い階層ほど「呼吸器系疾患」患者の比率が高く、年齢が高い階層ではケガ等「外因の影響」患者の比率が高くなる。
- ・ 40歳以上では、年齢階層が上がるにつれ、「循環器系疾患」患者の比率が増加している。



うらなり

【症状の程度別患者比率】

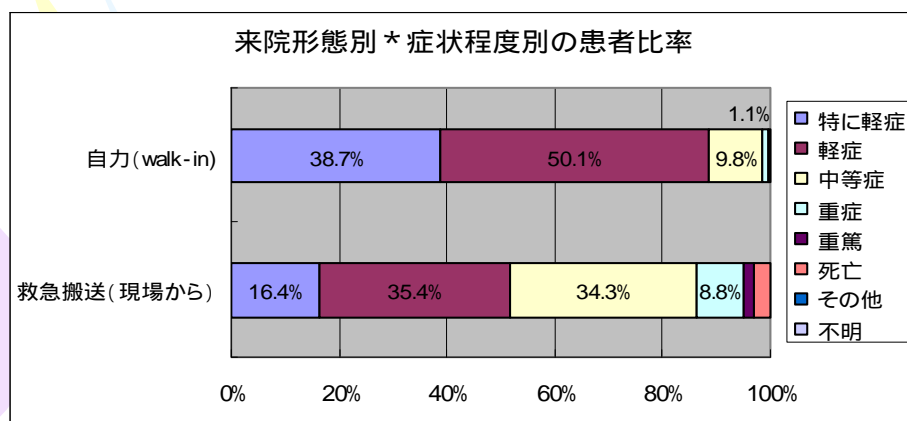
全体の8割近くが軽症患者



- ・ 患者の症状の程度を、『消防統計』の基準で見ると、通院加療を要しない「特に軽症」患者及び、入院を要しない「軽症」患者が全体の77.7%を占めている。
- ・ なお、生命の危険の可能性のある「重症」以上の患者の比率は、全体のわずか5.4%程度に過ぎない。

【来院形態別 * 症状の程度別患者比率】

自力(walk-in)患者の9割近くが軽症患者



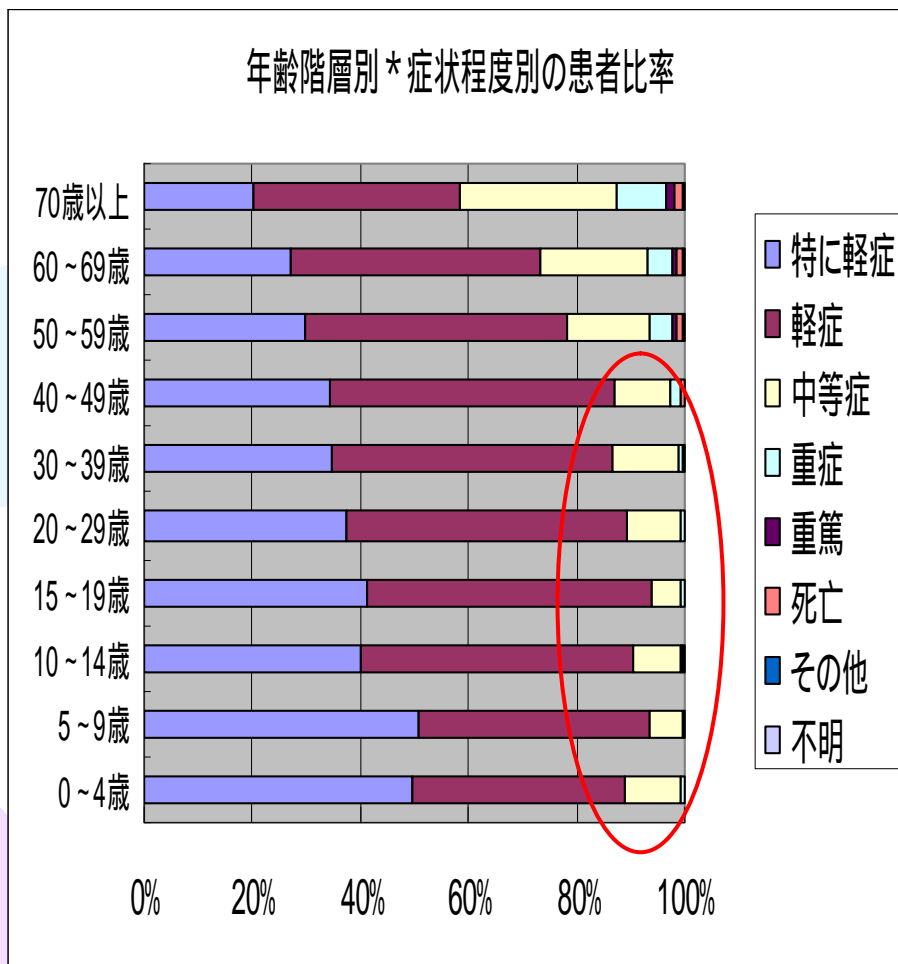
- ・ 「特に軽症」、「軽症」の患者の比率は、救急車で現場から搬送される場合は51.8%であるが、自力での来院(walk-in)の場合は88.8%と増加する。



たけむき

【年齢階層別 * 症状の程度別患者比率】

年齢階層が低いほど、軽症患者の比率が高い



・ 「0~4歳」から「40~49歳」までの年齢階層では、軽症患者の比率が8割を超えている。
 ・ 高齢者になるほど、軽症患者の比率が減少し、「70歳以上」では6割を下回っている。



タカちゃん



マミナ

【平成20年度との比較】

平成21年11月は、県内全域でインフルエンザが流行し受診者が増加したため、平成20年11月の調査結果と比較する。

受入患者総数:10.5%減少 (平成20年値 16,362人)

軽症患者数:13.3%減少 (平成20年値 13,126人)

医療圏別では、八幡浜・大洲圏域、宇和島圏域の患者数が増加し、他の4医療圏(宇摩、新居浜・西条、今治、松山)では減少しているが、軽症患者数では、すべての医療圏で減少している。

時間帯別患者数

曜日別、時間帯別では、平日の夕方～夜間、休日の日中に患者が集中する傾向は20年度と同様だが、すべての時間帯で患者数が減少している。

年齢階層別患者数

年齢別でも、高齢者層、乳幼児、比較的若い勤労層の患者数が多い傾向は同様。「70歳以上」を除く、すべての年齢階層で患者数が減少しているが、特に「0～4歳」の患者の減少率(27.5%)が著しい。

小児救急医療電話相談(#8000)の効果

(1日平均利用件数:平成20年11月 4.5件、平成22年11月 11.7件 2.6倍)

来院形態別患者数

傾向は同様だが、自力で来院(walk-in)した患者が12.4%減少するとともに、自力で来院(walk-in)した患者における軽症患者数も13.9%減少している。

受診科別、傷病別患者数

傾向に大きな変化はないが、小児科受診患者が28.2%減少していることが特徴的である。